P06 苗木規格差に着目した生長量比較試験について その２

留萌南部森林管理署　佐々木　颯
堂坂　文彦

研究の背景･目的

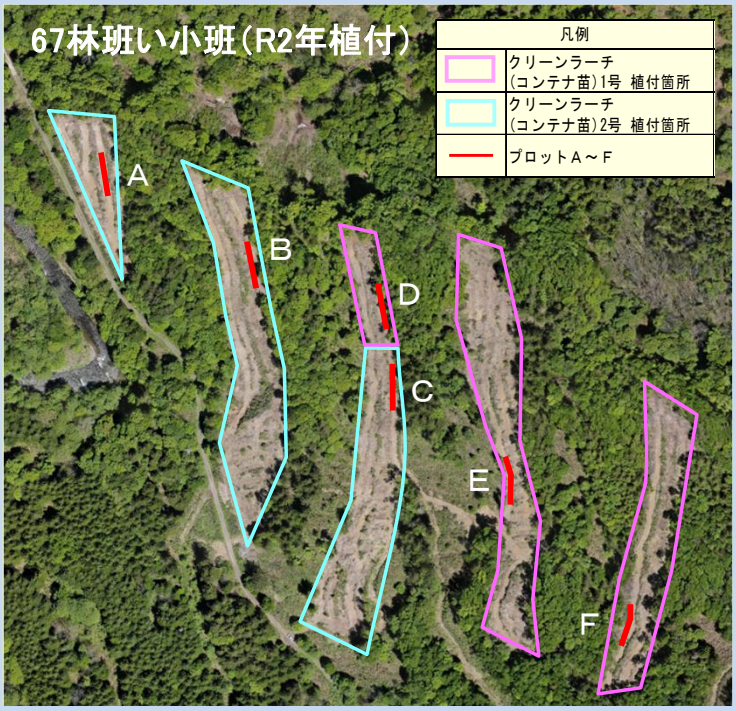
近年の林業の現状を踏まえ北海道森林管理局「新しい林業」実行プランでは「下刈回数の削減」「低密度植栽の推進」「機械の使用」等の造林コストを縮減する取組が掲げられています。

こうした中、当署では「苗木の規格差による『生長量』『活着率』等の違い」を調査し、規格差による生長量の違いの有無、下刈完了までにかかった経費の差等を明らかにし、今後の苗木規格を選択する際の一指標となることを目的に令和２年度植栽箇所で、令和３年度より本試験を実施してきました。

本発表では昨年度発表したものに今年度の調査結果を追記しましたので、その結果と今後の展開について発表します。

研究の内容･成果

試験地の概要

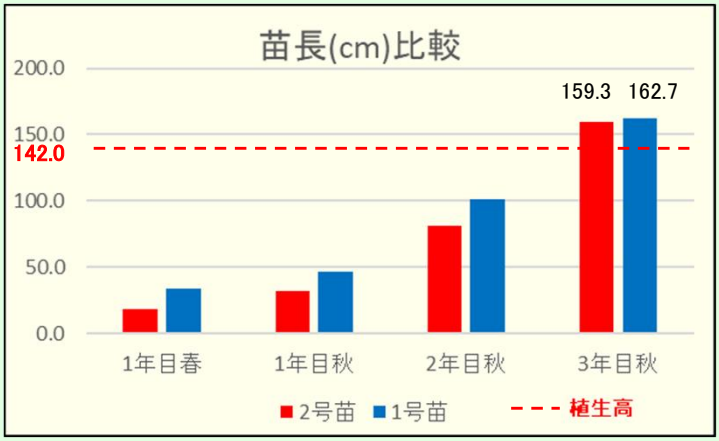
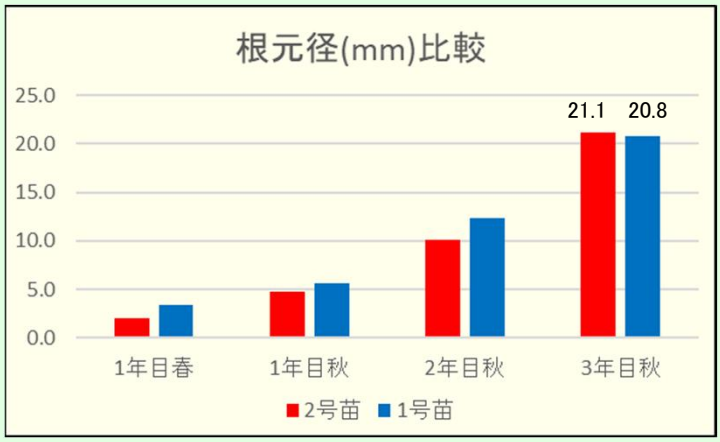
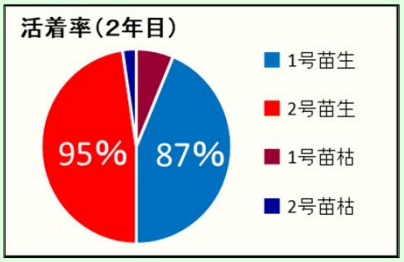
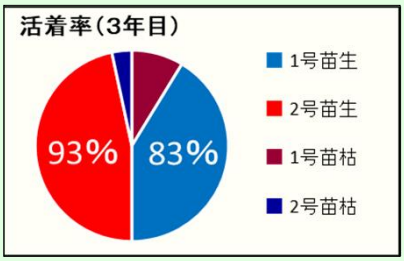
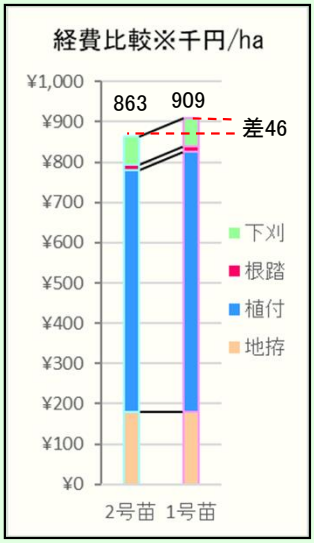


区域面積：7.80ha　　実行面積：2.79ha
植付樹種：クリーンラーチ（コンテナ苗）※緩効性肥料入り
植付本数：１号苗…2,700本　２号苗…2,900本　※2,000本/ha
地拵仕様：筋刈　刈幅 3.0m×残幅 5.0m　※大型機械地拵
植付仕様：２条植　列間 1.50m　×　苗間 1.25m
下刈回数：１回刈（令和４年度から実施）
地　況　等：南西向、標高：140m～260m、傾斜：16°　～25°

今後の展開

今回の調査の結果、規格差による苗長、根元径についてほとんど差が見られず、活着率については植栽条件の違いにより差が表れたものの、植栽条件の近いＣ、Ｄプロットでは大きな差はないことから、規格差による活着率の差はないと推察します。

どちらの苗木も苗長が植生高を脱したことから、下刈は今年度で終了予定で下刈回数は２回で終了となりました。（造林方針書では４年５回）

経費比較では苗木代の差分の縮減とどちらの規格の苗木も下刈回数の削減が可能という結果となりましたが、今後も経過観察を続けていく予定です。

調査結果